

自然の書

サイード・ヌルスィー

リサーレ・イ・ヌール全集より
自然の書

書名：自然の書

著者：ベディーウツザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語からの翻訳：ナオキ・ヤマモト

発行所：レイハン出版

発行日：2026 年1月

印刷所：IMAK（イマク）〔イスタンブル〕



著作権 © レイハン出版 2026

I S B N : 978-83-63796-43-3

リサーレ・イ・ヌール全集より

自然の書

サイード・ヌルスィー



2026年1月

自然の書

（もとは第十七の光章の第十六の覚書であったが、その重要性ゆえに第二十三の光章となった。自然から生ずる不信の思想を、もはや蘇りえぬかたちで死に絶えさせ、不信の基礎石を粉碎する書である。）

警告

本覚書においては、自然派のうち不信を唱える者たちの歩む道の内実が、いかに理性より遠く、いかに醜悪で、いかに迷信に満ちているかが示されている。

少なくとも九十の不可能を内包する九つの不可能性によってその論が打ち碎かれるのである。

他の書簡において、これらの不可能のいくつかはすでに部分的に説明されているゆ

え、ここでは極めて簡略であることを旨とし、いくつかの段階を省いてある。

そのために、思わずこう疑問が胸に浮かぶ——「これほどまでに明白で、しかも露骨な迷信を、かの名高き理性の哲学者たちはいかにして受け入れ、その道を歩んでいるのか」と。

されど実際のところ、彼らは自らの学説の内面を洞察し得なかったのである。

というのも、その学派の真の本質、ならびにその道が必然的にもたらす結論こそは、ここに列挙された各「不可能」の末尾で明示される通り、醜悪にして忌むべく、理性に反するものであるからである。

（傍注）

この書が著されるに至った理由は、信仰の真理をきわめて挑発的かつ卑劣な仕方で侮辱し、墮落した理性の及ばぬものを「迷信」と称し、無神論を「自然」に帰して、クルアーンに攻撃を加える者どもの出現にある。

その攻撃は烈しく筆者の心に怒りを燃え立たせ、信仰を拒み虚妄の宗派に従う不信

者らに、激しくも峻厳なる鉄槌を下さしめたのである。

さもなくば、『リサーレ・ヌール』の道は常に清らかで優雅、柔らかき言葉を旨とするのである。

要するに、彼らの宗派の要約とは、彼らの方法そのものが必然的に導く、避けがたき帰結にほかならぬ。

このことを、明白かつ確固たる証明をもって、いささかの疑念を抱く者にも詳細に示し、立証する覚悟がある。



بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
قَالَتْ رَسُولُهُمْ أَفَى اللَّهِ شَكُّ فَاطِرِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

この尊き節は、反問的否定の形式をもって、「アッラーに関して疑いなどあってはならず、あり得ない」と宣言している。

すなわち、アッラーの存在と唯一性とは、あまりに明白にして、ほとんど自明の理の段階に達していることを示しているのである。

この秘密を解き明かす前に、一つの注意を述べねばならぬ。

ヒジュラ暦1338年、わたしはアンカラへ赴いた。イスラーム軍がギリシャ軍に勝利した歓喜のさなか、信仰者の心が高揚するその都において、わたしはひそかに、きわめて恐るべき無神論の思想が忍び込み、信仰を損ね、毒を撒き散らそうとしているのを見た。

わたしは叫んだ―「ああ、なんということか、この竜のごときものが信仰の柱をも噛み砕こうとしている！」と。

その時、このクルアーンの節が、まさに自明の段階においてアッラーの存在と唯一

性を明らかに示しているがゆえに、わたしはその節に依り頼み、クルアーンの叡智から力強い証明を汲み取り、その無信の竜の頭を打ち砕くに足るほどの力を得て、アラビア語の論文としてそれを書き記した。その論文はアンカラのYeni Gün 印刷所にて印刷された。

しかし、嘆かわしいことに、アラビア語を解する者が少なく、また真剣に読む者も稀であったため、その極めて簡潔かつ要約された証明は、十分なる効果を示すことができなかった。

悲しいかな、その不信の思想はかえって発展し、勢力を得るに至った。やむを得ず、今ここにおいて、その証明をトルコ語である程度詳しく述べようとするものである。

その証明のいくつかの部分は、すでに他の書簡において完全に説明されているため、ここではその要点のみを記す。他の書簡に分散している数々の論証は、この証明において部分的に一体となり、それぞれがこの全体の一部として働くことになるのである。

序論

人よ、知るがよい。人々の口から、無信仰の匂いを漂わせる恐るべき言葉が発せられている。信仰者の中にも、それを知らずに用いる者がある。ここでは、そのうち重要な三つを挙げて明らかにしよう。

第一に、「原因がそれを創造した」という言葉である。すなわち、「諸原因がこの事物を生み出した」という意味である。第二に、「自らによって形成された」。すなわち、「それは自ずから形を成し、生じ、完成した」という意味である。第三に、「自然が要求し、創造した」。すなわち、「それは自然の必然として自然が創り出した」という意味である。

さて、存在者があることは否定できぬ事実である。しかも、あらゆる存在は巧妙にして目的的に、知恵ある秩序のもとに現れている。また、それらは永遠の昔からあるものではなく、新たに生じるものである。

ゆえに、ああ無信の人よ、次のいずれかを言わねばならぬ。

すなわち、この存在、たとえば一つの生き物は、

(1) 世界の原因たちがそれを創造している、すなわち原因が集まってこの存在を生み出す、

あるいは

(2) それは自ずから形成される、

あるいは

(3) 自然の要請によって自然の作用から生じる、

あるいは

(4) 栄光と威厳の主たる全能者アッラーの力によって創造される。

理性の上では、この四つの道以外に道はない。

もしも前三つの道が不可能、虚妄、成立不能であることが確実に証明されるならば、第四の道—すなわち唯一性の道—が必然かつ明白に真実として立証される。

第一の道について

第一の道とは、世界の原因たちが集まって存在を形成し、被造物に生命を与えるという主張である。その無数の不可能のうち、ここでは三つだけを挙げて示す。

第一の不可能

ある薬局に、極めて多様な物質で満たされた百余の瓶が並んでいるとしよう。そこから「生命ある霊薬」を調合するよう求められたとする。また、生命を蘇らせる不思議な解毒剤をその中の成分で作らねばならぬとする。

さて、われわれはその薬局に行き、多くの生きた薬剤と数々の霊薬がすでに調合されているのを見た。それぞれを詳しく観察してみると、瓶の中の物質から特定の分量—たとえば、ある瓶からは一、二ディルハム、別の瓶からは三、四ディルハム、また他からは六、七ディルハム—と、まことに精密な秤のもとで異なる量が取られていた

。

もしもそのうちの一つの瓶から、ほんの一ディルハムでも少なく、あるいは多く取られたならば、その薬はもはや生命をもたず、その効能を示すことはない。

また、その生命をもたらす靈薬を調べてみると、すべての瓶から、それぞれ異なる計量で一成分ずつ取られており、もしも微塵ほどでも多く、あるいは少なくなれば、靈薬はその効力を失ってしまう。

しかも、その瓶は五十を超えており、それぞれから異なる秤で異なる分量を取る必要がある。

さて、理性ある者よ、問おう。もしもそれらの瓶が偶然に、あるいは突風の衝撃によって倒れたとしよう。そのとき、各瓶から、ちょうど必要な分量だけが流れ出て、混ざり合い、完全な比例で一つの生命ある薬を形成するなどということが、いかなる意味で「あり得る」と言えるだろうか？

これほどまでに荒唐無稽で、理性に反し、虚偽なることがあろうか。もしも一匹のロバが、倍に愚かさを増したのち人間になったとしても、「この考えだけは受け入れぬ」と言って逃げ出すであろう。

かくのごとく、このたとえと同じく、すべての生けるものはまさに生命をもつ薬剤のごとく、あらゆる植物は生命を与える靈藥のごときものである。それらはきわめて多様な成分、多くの異質の物質から、極度に精妙な秤によって取られた物質が組み合わされてできている。ゆえに、もしこれを原因や元素に帰して「原因が創造した」と言うならば、それはまさしく薬局の瓶が偶然に倒れて混じり合い、完全な靈藥ができ上がったと言うに等しい。百倍にも理性から遠く、絶対に不可能で虚偽なることである。

結論として言うならば、この大いなる宇宙という薬局において、永遠の叡智をもつアッラーが運命と定め の秤によって取り出す生命の素材は、限りなき叡智と無窮の知識、そしてすべてを包む意志によってのみ存在し得る。「目もなく耳もなく、境界もなく奔流のごとく流れ行く元素と自然の作用と原因の業である」と言う不幸な者は、
「その不思議な靈藥は瓶が倒れただけで偶然できたのだ」と言い張る酔漢よりもなお

愚かである。かくのごとき不信は、愚劣にして狂妄、酔いどれのたわ言である。

第二の不可能

もしすべての存在が唯一にして無比の全能なる栄光の主アッラーに帰されず、諸原因に帰されるならば、世界の無数の元素や原因のすべてが、それぞれの生き物の存在に干渉していることにならねばならぬ。しかるに、蠅のような小さな被造物の身体の中には、完全な秩序と精密な計量と完璧な調和が見られる。互いに相反し、異質で、衝突し合う無数の原因が、完全な一致のもとに一匹の蠅の形を成すなど、あまりにも明白な不可能である。蠅の羽ほどの理性でもあれば、「これは不可能だ、あり得ぬ」と叫ぶであろう。

実際、一匹の蠅の小さな身体は、宇宙のほとんどすべての元素と原因に関わっており、むしろその縮図とも言うべきものである。もしそれを永遠の全能者アッラーに帰さないならば、物質的な原因たちはその存在のそばに、あるいはその内部に直接在しなければならぬ。いや、蠅の眼の中の一つ

の細胞——その全身の微小な模型のような部分——にまで入り込まねばならぬ。なぜなら、もし原因が物質的であるならば、結果のそばに、しかも内部に存在することが必然だからである。

ゆえに、指先すら置く余地のない小さな細胞の中に、宇宙の基本要素や自然の諸性質がすべて物質的に入り込み、まるで職人のように内側で働いていると認めねばならなくなる。これほど荒唐な説を聞けば、最も愚かな懷疑論者でさえも顔を赤らめて恥じるであろう。

第三の不可能

الْوَاحِدُ لَا يَصْدُرُ إِلَّا عَنِ الْوَاحِدِ

—「唯一なるものは、唯一のものからしか生じない」という確立された原理によれば、ある存在に統一があるならば、それは必ず一つの源、一つの手から発するものである。ましてや、その存在がきわめて完全な秩序と精密な比例をそなえ、総合的な生命を宿しているならば、それが混乱と対立を生む多くの手から出たものでないことは

明白である。むしろ、力強く英知に満ちた唯一の御手から出たことを示している。

それにもかかわらず、無限にして無機、無知にして混乱する自然の原因という無数の盲目の手に、限りない可能性の道のなかで寄り集まり混じり合いながら、しかもその盲目と聾がますます増すというのに、そのような原因に秩序正しく比例のとれた一なる存在を帰するのは、百の不可能を同時に受け入れるようなものである。

この不可能をさておくとしても、物質的原因の作用は必ず直接的な接触を要する。ところが、それら自然の原因が接するのは生きた存在の外面にすぎぬ。実際に見ると、それらの原因の手が届かず、触れることのできぬその内面は、外面よりも十倍も整然とし、繊細で、技としてはるかに完全である。物質的原因の手も道具もまったく入り込めず、外面にすら触れ得ぬほどの微小な生物、極小の生き物ほど、むしろ最大の被造物よりも芸術的に驚異的で、創造の妙に満ちている。

それを、盲目にして聾、無知にして粗雑、互いに相反し、巨大にして遠く離れた自

然の原因に帰する者は、百倍の盲目、千倍の聾であると言わねばならぬ。

第二の問題

すなわち「それは自らによって形を成した」という説である。

この一句にもまた、数多くの不可能と虚偽が含まれている。多方面からして誤りであり、不合理である。その不可能のうち、見本として三つを挙げて明らかにしよう。

第一の不可能

頑迷なる否認者よ、おまえの自己崇拜（エゴイズム）はおまえをかくも愚鈍にしてしまった。百の不可能を同時に受け入れることを、あたかも一つの理として信じている。

汝自身、存在しているではないか。そして汝は単純な物質でもなければ、無機的にして不変の存在でもない。むしろ絶えず更新され、きわめて精密な機構をもつ奇跡的な存在、つねに変化のただなかにある壮麗な宮殿のようなものである。汝の身体のな

かでは、あらゆる瞬間に粒子（原子）が働いている。汝の存在は宇宙全体——とりわけ糧との関係、さらには種の存続との関係——に密接に結びつき、常に交流している。

汝の体内で働く粒子たちは、この関係を損なわぬよう注意を払って動いている。まるで慎重に歩を進めるかのように、その一挙手一投足に細心の配慮を見せている。まるで宇宙全体を見渡しているかのように、汝と世界とのあらゆる関係を見極め、その秩序に従って行動している。そして汝は、外なる感覚も内なる感覚も通して、これら粒子の驚異的な働きの恩恵を受けているのである。

されば、もし汝が自らの身体における粒子を、永遠の全能者アッラーの法則によって動く小さな従者、あるいは天の軍勢の一員、または運命の筆の先端——すなわちそれぞれが一つの筆先、または力の筆の一点である——と認めないならば、次のことを認めねばならぬ。

すなわち、汝の眼の中で働く一つの粒子が、汝の全身を隅々まで見渡し、さらに汝が関係をもつすべての宇宙をも見ることの

できる眼をもち、また汝の過去と未来、血統と起源、元素の源泉、糧の供給源をすべて知り、理解するほどの知性をもつということになる。すなわち、汝のようにこの問題に関して一粒の理性も持たぬ者の、その身体の一粒子に、百人のプラトンに等しい知識と意識を与えることになる。これは千倍に狂気じみた迷信であり、理性を捨てた妄想にほかならぬ。

第二の不可能

汝の身体は、千のドームをもつ驚異の宮殿に似ている。その各ドームの石は、柱もなく互いに寄り添い、空中に吊るされている。いや、汝の身体はこの宮殿よりも千倍も不思議である。なぜなら、この肉体という宮殿は常に完全な秩序のもとに新しく造り替えられているからである。魂や心や霊的諸感覚といった奇跡的存在をしばらく措いても、身体各器官それぞれが一つのドームを持つ殿堂に等しい。粒子たちは、そのドームの石のように、完全な均衡と秩序のうちに互いに支え合い、驚異の建築と非

凡なる技をもって、眼や舌のような奇跡の作品を示している。

もしもこれらの粒子が、この宇宙の主の命に従う従者でなければ、その一つ一つが身体全体のすべての粒子に対して同時に絶対の支配者でありながら、またそのすべての粒子の完全な被支配者でもあり、かつ互いに等しく、それでいて支配の点では互いに対立するということになる。さらに、それぞれが本来ただアッラーのみに属する属性の源泉でありながら、同時に極めて限定され、しかも無限に自由であるという矛盾した在り方を取らねばならぬ。こうして、唯一にして無比なる存在のみの業としてしか説明できぬ完璧な秩序をもつ作品を、無数の粒子に帰するというのは、理性の微塵でも持つ者ならば明白な不可能、いや百重の不可能であると理解せざるを得ない。

第三の不可能

もしも汝の身体が、唯一にして無比なる永遠の全能者の筆による書でなく、自然や原因に属する印刷物であるというならば、汝の身体の一つの細胞から始まり、入れ子

のように重なり合う無数の構成層の数だけ、自然の鑄型が存在しなければならぬ。

たとえば、われわれの手にある一冊の書物が、もし「書かれたもの」であるならば、筆を持つ書き手がその知識に基づいて全体を書き上げる。だが、もしそれが筆に属さず、偶然に生じた、あるいは自然の所産だと言うならば、それはもはや印刷物のようなものと見なされねばならず、各文字ごとに鉄の型を必要とする。印刷所では、文字の数だけ鉄の活字があり、それらが組み合わされて頁を成すように、一本の筆に代わって文字の数だけ筆が存在せねばならぬ。

さらに、もし大きな文字の中に細い線で小さな書が書かれているような構造——すなわち、一つの大文字の中に千もの細字が刻まれているような場合——であれば、その一つの文字のために千本の筆が必要になる。そして、もしそれらが互いに入り組み、整然とした秩序を保って、汝の身体のような形を取っているならば、そのすべての層、それぞれの部分ごとに、構成要素の数だけ鑄型がなければならぬ。

仮に、この百重の不可能を無理に「可能」と言い張ったとしても、この整然たる芸術的な鉄の文字や精緻な鋳型、筆そのものを造るために、再びそれらの数だけ筆と型と文字を造らねばならぬ。なぜなら、それらもまた造られたものであり、精緻な技をもって形づくられているからである。そしてその過程は果てしなく連鎖してゆく。

見よ、これがいかなる考えであるかを悟れ。汝の体を構成する粒子の数だけ、不可能と迷信とがその中に含まれている。頑ななる無信の者よ、恥を知れ、この迷妄から立ち返れ。

第三の語：

すなわち「自然が必然とする」「自然がそうさせる」という主張である。

しかし、この主張には数多くの不可能な点が含まれている。ここでは、その例として三つを挙げるにとどめる。

第一に、もしも現存する被造物、ことに生あるものにおいて見られる、その深い知恵と洞察に満ちた技芸と創造の妙が、永遠

の太陽たるアッラーの定めと力の筆に帰せられず、盲目にして聾し、思慮なき「自然」や「力」といったものに帰せられるならば、かならずや自然が創造のために、あらゆるものの中に限りなき数の靈的機械や印刷所を内蔵していなければならぬことになる。

あるいはまた、あらゆるものの中に宇宙を創造し、統御するに足る力と知恵が埋め込まれていなければならぬことになる。

なぜなら、太陽の光彩とその反映が、地上の小さなガラスの粒や水滴の中に映じて見えるように、もしもそれらの微小な光の像が天空に輝く唯一の太陽に帰せられないならば、爪の先ほどにも満たぬ小さなガラスの粒の中に、太陽と同じ性質を本質的に有し、外的に存在する微小な太陽を受け入れねばならぬ。すなわち、ガラスの粒の数だけ「自然の太陽」が存在することを認めねばならないのと同じである。

この譬えのごとく、もしも存在と生あるものが直接に永遠の太陽の御名の輝きに帰せられないならば、あらゆる被造物、ことに生あるもの一つひとつの中に、限りなき

力と意志、果てしなき知と智慧を宿す「自然」なるもの、すなわち小さき神を認めねばならぬことになる。

このような思考の道は、宇宙における虚妄のうちでもっとも荒唐無稽にして、もっとも迷信的なものである。

万有の創造主の技芸を、想像上の、取るに足らぬ、無意識の自然に帰する者は、百倍も獣より獣にして、無意識なることを自ら示すのである。

第二の不合理

この世に存在するあらゆる被造物が、きわめて秩序正しく、衡（はかり）のごとく均衡を保ち、芸術的に、かつ深き叡智に満ちている。もしこのような存在が、限りなき力と知恵をもつ御方——すなわち全能にして英智なる御方——に帰せられず、むしろ「自然」に帰せられるならば、当然ながら「自然」は、一握りの土の中にヨーロッパ全土の印刷所と工場の数ほどの機械と印刷器を備えていなければならぬ。そうでなければ、その一握りの土が、無数の花や果

実の源泉となり、それらを形づくり育むことはできないであろう。

なぜなら、花々の鉢となる一畝の土の中に、種が順々に蒔かれるとき、互いにまったく異なる形と姿の花々が、正確かつ美しく描き出される能力が現に見られるからである。もしこの現象が、威厳と壮麗さをもつ全能の御方に帰せられぬならば、そのときは、その土の一畝の中に、花一つひとつのために独自の霊的な機械が存在しなければならぬ。さもなくば、かかる現象は生じえない。

なぜなら、種子とは、精や卵のように、構成する物質が皆同じだからである。すなわち、水素・酸素・炭素・窒素など、形をもたぬ雑多な混合物にすぎぬ。さらに空気も、水も、熱も、光も、いずれも単純で無意識にして、すべてに対して奔流のごとく働く。にもかかわらず、無数の花が、互いに異なる形と秩序と技法をもって同じ土から生じるのは、明らかにかつ必然的に、かの土の中に、霊的にはヨーロッパ全土にも匹敵するほどの、微細なる印刷所と工場が潜んでいなければならぬことを意味する。

そうでなければ、このように生命ある織物や、千差万別の文様をもつ布を織り出すことは到底できぬ。

このように見れば、自然主義者たちの不信の思想が、いかに理性の領域を外れて迷走しているかが分かる。自然を創造主と見なす人間の形をした愚かなる酔漢どもが、「われらは科学と理性の徒である」と称していながら、いかに理性と科学から遠く離れ、絶対に不可能にしていかなる角度からも成立しえぬ妄想を、自らの信条として掲げているかを見よ。そして笑え、唾せよ。

もしあなたがこう問うならば

「もし存在するものどもが自然に帰せられるならば、かくも奇怪な不可能が生じ、絶対に成り立たぬほどの困難が生ずるという。しかし、唯一にして自存なる御方に帰せられるとき、いかにしてその困難が消え去るのか。そのような不可能が、いかにして容易で必然なる実在へと転ずるのか」と。

その答えは次のとおりである。

第一の不合理的の譬えにおいて述べたように、太陽の反映の輝きは、いとも容易に、

いかなる労苦もなく、最も小さなガラスの粒から最も大いなる海の面にいたるまで、無数の小さな像を通じて光と影響とを明らかに示す。だがもしその関係が天上の太陽との結びつきから断たれるならば、各微粒の中に本来的・自存的な太陽が外的に存在すると認めねばならず、それは不可能の極みに等しい困難である。

これと同じく、あらゆる存在が直接に唯一にして自存なる御方に結びつけられるならば、必然の程度において極めて容易に、ただその帰属と御光の反映によって、各存在に必要な一切が与えられ得る。

しかしもしその結びつきが断たれ、その従属が放縦に変わり、万物がそれぞれ勝手に任され、自然に委ねられるならば、そのときは無数の不可能と困難の果てに、たとえば一匹の蠅のごとき生あるもの——それは宇宙の縮図たる驚くべき生命の機構を備える——を生み出すために、その内部の盲目なる自然が、宇宙全体を創造し統御する力と智慧を持つと仮定せねばならぬ。これは一つの不可能にとどまらず、むしろ千の不可能を積み重ねたものに等しい。

要するに、存在の必然者に同等の者、あるいは並ぶ存在を認めることが不可能であり矛盾であるように、同じくその主宰と創造に他の者が関与することもまた、神性の分有と同様に不可能かつ矛盾である。

しかし第二の不合理における困難については、すでに多くの書簡において証明されているように、もし万物が唯一にして独一なる御方に帰せられるならば、全てのものが一つのものを造るほどに容易である。だが、もし原因や自然に帰せられるならば、一つのものを造ることが、全ての存在を造るほどに困難であることが、数多くの確固たる証拠によって示されている。

その証拠の要旨は次の通りである。

たとえば一人の人が、王に仕える兵士あるいは官吏として従属するならば、その兵士や官吏はその従属の力によって、自身の力を百千倍も超える働きをなし得る。そして王の名のもとに、ときには一人の強者をも捕らえることができる。なぜなら、彼が行う仕事や成す事業のための装備や力は、彼自身が携えるものではなく、また携える必要もないからである。その従属関係によって、王の宝庫と、その背後にある大軍の

威力が彼の背後にあり、その力と装備を担っているのである。ゆえに、彼の行う働きはまるで王そのものの働きのようにであり、彼の示す業績は軍勢の成果のように驚嘆すべきものとなる。

蟻が王の命を帯びた任務によってファラオの宮殿を崩壊させ、蠅がその従属の力によってニムルードを殺したのも、この譬えのごとし。また同じくその従属のゆえに、一粒の小麦ほどの松の種が、壮大な松の樹のすべての装備を育むのである。

（傍注）

実に、この従属があるならば、その種子は神の定めより命令を受け、その驚くべき働きにあずかる。しかしもしその結びつきが断たれるならば、その種子の創造には、巨大な松の木を創るよりも多くの装備・能力・技巧が必要となる。なぜなら、山にそびえる力の作品たる実体的な松の木のすべての器官と装備が、その小さな種の中に、定めのある作品として潜在していなければならないからである。というのも、その巨大な木の「工場」はまさにその種子であり、その内部に存在する「定めによる霊的な木」が、力によって外に現れ、実体ある松の木となるからである。

もしこの従属関係が断たれ、その任務が解かれるならば、その者は自らの仕事に必要な装備と力とを、すべて自らの腰と腕に担わねばならぬ。その場合、彼ができるのは、自らの腕力の限り、腰にある弾薬の数だけの働きにとどまる。

かつて従属によって容易に行っていた仕事を、このような状態で行うとすれば、当然ながら、彼の小さな腕に一軍の力を、彼の腰に王の兵器工廠を背負わせねばならぬことになる。だがこれは、笑い話を語る道化ですら恥じるほどの荒唐無稽な妄想である。

要するに、存在の必然者にすべての被造物を帰せば、その創造は必然のほどに容易である。これに反して、それを自然に創造の源として帰せば、不可能のほどに困難であり、理性の領域を超えた荒唐無稽の妄想となる。

第三の不合理

この不合理を明らかにするために、他のいくつかの書簡で示された二つの譬えのうち、第一の譬えを述べよう。

第一の譬え

文明のあらゆる成果によって完全に整えられ、装飾されている無人の荒野に、一つの壮麗な宮殿が建てられていた。そこへ、極めて野蛮な一人の男が入っていく。彼は中を見回し、数千に及ぶ秩序正しく美しく作られた品々を目にする。しかし、その無知と愚かさゆえに、外から誰かがこの宮殿を建てたとは思わず、この宮殿の中にあるものの一つが、宮殿全体を含めて自らをも作ったのだと妄想し始める。

どの品を見ても、その野蛮な知恵ですら「これがこの建物を作ることなど不可能だ」と認めざるをえない。やがて彼は、宮殿の設計図や設備の目録、そしてその運営の規則が書かれた一冊の帳面を見つける。その帳面は手も目もなく、槌も持たず、他の品々と同じく、宮殿を築き装う力など持た

ぬのだが、彼は他に説明できず、仕方なくこう言う。「この帳面こそが、この宮殿を設計し、整え、装飾し、これらの品々を作り、取り付け、配置したのだ」と。そしてその愚かさを、狂人や酔漢の妄言にまで高めてしまう。

まさにこの譬えのごとく、無限に整然として完全であり、あらゆる面が驚くべき知恵で満ちているこの宇宙という宮殿の中に、神の存在を否定する「自然主義」の考えを抱いた野蛮な人間が入り込む。

彼は、可能界を超えたところにおられる存在の必然者の創造の業を思わず、またそれを退け、可能界の中で「神の定め書き換えの板」であり、「神の力の働きを記す移ろう帳面」としての存在にすぎぬもの——誤って「自然」と名づけられた、神の法則と習慣の集成、そして神の技芸の目録——を見て、こう言うのである。

「この万物には原因が必要だ。何ものもこの帳面ほど関係しているようには見えない。確かに、盲目で意識も力もないこの帳面が、絶対的主宰の業であり無限の力を要

する創造をなすことなど、理性のどの側面からも受け入れ難い。しかしながら、永遠の創造者を認めぬ以上、最も適当なのは、この帳面がそれを造り、造りつづけると認めることだ」と。

そこで我々是这样言う。

愚者のうちの愚者にして、愚かさを極めた酔える無知の者よ！頭を自然の泥沼から引き上げ、後ろを見よ。原子から星々にいたるまで、万物がそれぞれ異なる言葉で、全能にして威厳ある造り主の存在を証しし、その指をもって示しているのを見よ。

その宮殿を建て、その帳面に設計を書き記した永遠の絵師の輝きを目撃せよ。その御命令に目を向け、クルアーンを聞け。そしてその妄言から救われよ。

第二の譬え

きわめて野蛮な一人の男が、壮麗なる軍営に足を踏み入れる。そこでは、きわめて整然とした一軍が、全体として一糸乱れぬ訓練と規律ある動きをしている。彼は、一兵士の動作によって、連隊や大隊、師団が立ち上がり、座り、進み、あるいは号令一

下「撃て」と言われて一斉に発砲するのを目撃する。

しかし彼の粗野で無知な頭では、その背後にいる指揮官や、国家の定めた規律、王の法による命令体系を理解できず、それらを否定する。そして思う——「きっとこの兵士たちは互いに縄で繋がれているのだ」と。彼はその想像上の縄が、どれほど不思議なものであるかを考え、驚嘆する。

その後、彼はアヤソフィアのような壮麗なるモスクへ行き、金曜礼拝の日に入る。そこでは、無数の信者が一人の男（イマーム）の声に従い、立ち、ひれ伏し、座る様を目にする。しかし、天上的・靈的法の集成である「シャリーア（法）」と、その法の主（アッラー）の命令から生じた精神的な原理を理解しないために、彼はこの群衆もまた物理的な縄で結ばれ、その奇妙な縄が人々を捕らえ、操っているのだと想像する。そしてその滑稽な妄想は、最も野蛮な獣すらも笑うほどの愚昧な考えである。

まさにこの譬えのごとく、永遠にして永遠の君主の無限の軍勢の壮麗な軍営であるこの宇宙、そして永遠の崇拜の主の整然た

る大モスクたるこの天地の中に、野蛮そのものの「自然の思想」という不信の観念を抱いた不信者が入り込む。

彼は、永遠の王の叡智から生じた宇宙の秩序ある法則を、靈的・形而上のものとは知らず、すべて物質的なものだと想像する。また、主宰の王権に属する概念的法や、永遠の崇拜の主の「大自然のシャリーア」——すなわち、精神的で知的存在にすぎぬ諸法と原理——を、実体ある物質的なものと見なし、神の力に代えてそれらの法則を立て、それらに創造の力を授け、さらにはそれに「自然」という名を与える。

そして、神の力の一つの輝きにすぎぬ「力」を、自立した創造の主体であるかのように誤って考える。——これは、先の譬えの野蛮人よりも千倍も下劣なる野蛮である。

要するに、自然主義者が「自然」と呼んでいる、想像上の実体なきもの——それが仮に現実存在するとしても——、それは決して創造主ではなく、ただの「作品」にすぎない。

それは「絵」であって「画家」ではない。「法則」であって「立法者」ではない。

「被造物」であって「創造主」ではない。
「受ける性質」であって「働きかける創造者」ではない。「規律」であって「力」ではない。つまり、自然は「しるし」であって「源泉」ではない。

要するに、存在するものが確かにある以上、「存在の起源」は理性上、四つの道しか想定できない。そのうち三つの道は、明白な矛盾と不可能を含むことが確実に証明された。したがって、残る第四の道——「唯一の創造主」の道——が、必然的に真実であることが論証されるのである。

この第四の道こそ、クルアーンの聖句

أَفِي اللَّهِ شَكٌّ فَاطِرِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

が示す通り、いかなる疑念も差しはさむ余地なく、存在の必然者の神性と、すべてのものがその御手から直接に創造され、天地がその御支配の掌中にあることを明らかに示している。

おお、因果を神格化し、自然を崇拝する哀れな人よ。すべてのものの「本性」は、それ自体が他のものと同じく被造物である。なぜなら、それは技巧に満ちており、常

に新たに創造されているからである。また、あらゆる結果と同じく、その見かけの原因もまた創造された被造物にすぎない。しかも、あらゆる存在は多くの器官と装備を必要とする。ゆえに、それらの自然や原因を創造し、存在に与えた全能の御方が存在する。

しかも、その全能者が、無力な媒介を御自らの創造や支配に共同させる必要があらうか。決してあり得ない。むしろ、御方は直接に結果と原因とをともに創造し、御名の輝きと御知恵を示すために、秩序ある配置を与え、表面的な因果のつながりを見せているにすぎない。そして、この表面的な「原因」と「自然」を、御力の御手の前に置くことで、万物に見える欠陥や不完全さ、苦痛や不条理の責任をその仮の外衣に負わせ、御威厳を保っておられるのである。

果たして時計職人が、時計の歯車を作り、それを組み立て整えて時計を完成させるのと、歯車の中に奇妙な機械を新たに造り、その無生の機械に「さあ、お前が時計を作れ」と命じ、自分は関わらぬままにさせるのと、どちらが容易であろうか。後者が

不可能であることは明らかではないか。

また、書記が紙と筆と墨を持ち、自ら直接に書物を書くのと、その紙と墨と筆の中に、それらの書物よりもはるかに複雑で労苦を要する、たった一冊の書物のためだけの「自動書記機械」を造り、それに「さあ、お前が書け」と命じて自分は関わらぬままにするのと、どちらが合理的か。後者は、書くこと自体よりも百倍も困難であることは、いかなる良識をもってしても否定できない。

もしあなたが以下のように言うならば、

「確かに、一冊の本を書く機械を造ることは、その本を書くことより百倍も難しい。しかし、その機械が同じ本の多くの写本を作る手段となるならば、それは多少の容易さがあるのではないか？」

その答えはこうである。

永遠の絵師は、限りなき力によって、その御名の無数の輝きを絶えず新たにし、さまざまな形に表すために、万物の個性と独自の姿をかくも驚くべき様式で創造された。ゆえに、いかなる「神の署名の書簡」も、いかなる「主の書物」も、他のものと

全く同一ではない。必ずそれぞれに異なる意味を表す固有の姿がある。

もし目があるなら見よ——人間の顔に。アーダム以来いまに至るまで、そして永遠に至るまで、この小さな顔において、主要な器官は同じでありながら、一つとして同じ顔はない。それぞれの顔には、他のすべてに対して識別のしるしがある。このことは確然と証明されている。したがって、すべての顔はそれぞれ独立した書物である。ゆえに、各顔という書を形づくるためには、それぞれ別の筆具と秩序と構成が必要である。素材を取り寄せ、配置し、存在に要するものすべてを組み込むためには、まったく別の工房が必要となる。

仮に自然を印刷所と見なすことを許したとしても、印刷所にできるのは、すでにある整った版型に従って定まった配置を押し写すことだけである。その版型という秩序自体を創造することはできない。しかも、生命ある存在の身体における物質は、宇宙のあらゆる場所から、特定の秤にかなう精密な配列で集められねばならない。そのためには、依然として、その印刷所自体を創

造した全能の御方の力と意志が不可欠である。したがって、「自然が印刷所である」とする仮説は、全くもって無意味な妄想にすぎぬ。

この「時計」と「書物」の譬えのごとく、威厳と莊嚴の造り主、すべての力を有する御方は、原因を創造され、結果も創造される。そして御知恵によって、結果を原因に結びつける。宇宙の運行を整える神の法——すなわち大自然の法——の一つの現れとして、万物に映ずる御力の輝きを映し出す鏡としての「自然」を御意志によって定められた。そしてその自然の外的側面を御力により存在させ、万物をその自然の上に創造し、互いに融合させられた。

さて、これほどに理に適い、無数の証明によって裏づけられた真理を受け入れることのほうが容易であろうか——いや、それこそ必然の程度にまで確実なものである。

それとも、無生にして無知、被造にして創られた単純な物質——おまえが「原因」や「自然」と呼ぶそれら——に、あらゆる存在を生み出すための無限の装置と器官を

与え、叡智に満ちた業を自らの手で行わせるほうが容易であろうか。

それが絶対的不可能、理性の範囲を超えた荒唐無稽でないとでも言うのか。——その判断を、そなた自身の「公平な理性」に委ねよう。

不信者と自然崇拝者はこう言う。

「汝が我を理性へと招くゆえに、私は言おう。これまで我々が歩んできた道は、まことに誤っていた。百倍も不可能であり、きわめて有害であり、極めて醜悪なる道であったことを認める。これまでの汝の論証を少しでも理解する者ならば、原因や自然に創造を帰することが不可能であり、また全てのものを存在の必然者に直接帰することが必然であることを悟るであろう。ゆえに私は言う、『信仰に感謝あれ』と。私は信じる。

ただ一つ、なお疑問がある。私は確かに、尊厳なるアッラーが創造主であることを認める。しかし、いくつかの小さな原因が、取るに足らぬ事柄において多少の創造への関与を持ち、そこからわずかに称賛を得るとしても、それが主宰の王権にどのよう

な害を及ぼすのか？その威厳に欠けることがあるだろうか？」

その答えはこうである。

いくつかの書簡において、確固として証明した通り、支配の本質は「干渉を拒む」ことにある。たとえ最も卑しい権力者であれ、一介の役人であれ、自らの支配の領域に息子が干渉することを許さぬ。

さらには、支配への介入の疑いのみで、ある敬虔な王たち—たとえ彼らがハリーファであっても—が、罪なき息子をも処刑した例がある。これはまさに、「干渉の排除」という法が、支配においていかに根源的な原理として働いているかを示している。

一地方に二人の長官が存在する場合から、一国に二人の王が並び立つ場合に至るまで、支配における独立性が必ず要求する「共同統治の禁止」の法が、人類史においていかに多くの混乱を引き起こしつつ、その力を示してきたかは明白である。

さて、助けを要する弱き人間においてすら、そのわずかな統率権と支配力の影が、これほどまでに干渉を拒み、他者の参与を

排し、権威の独立を偏執的なまでに守ろうとするのを見よ。

ならば、絶対的支配を備えた主宰、すなわち主宰の段階における支配の完全性、神性の段階における命令の絶対性、唯一性の段階における独立性、そして全能の段階における完全な自足性——これらすべてを有する威厳と荘嚴の御方において、干渉の排除、共有の否定、相伴う者の追放が、その支配の不可避の必然であり、必ず伴う当然の帰結であることを、そなたの理性にて思い量るがよい。

しかし、第二の疑念はこうである。

「もし一部の原因が、いくつかの些細な出来事における小さな崇拜の対象となったとしても、全宇宙における原子から星々にいたるまでの被造物が、絶対の主、存在の必然者へ向けて捧げる崇拜に、いかなる損失があらうか？」

その答えはこうである。

この宇宙の英智ある創造主は、全宇宙を一本の大樹のように創り、その最も完全な

果実を意識ある存在とし、その中でも最も総合的な果実を人間とされた。

そして人間における最も重要な働き、すなわち創造の目的の結晶であり、天性の究極の目標であり、人生の果実であるもの—それが感謝と礼拝である。

この礼拝と感謝を、全的支配者にして自存独立の命令者である、自己を知らしめ、愛させるために宇宙を創造した唯一なる御方が、他の手に委ねるであろうか？

創造の究極の結果、宇宙の果実を無意味にし、自らの叡智に反することをなさるであろうか？—断じてあり得ない。

さらに、御自身の叡智と主宰を否定させるような形で、被造物の崇拜を他者へ向けることを許されるであろうか？—決してない。

また、無限の程度において御自らを愛されしめ、知らしめようとされる御方が、御業を通してそれを絶えず示しておられるのに、最も完全なる被造物たる人間の感謝と忠誠、愛慕と礼拝を他の原因に向けさせ、御自身を忘れさせ、宇宙における崇高な目

的を否定させることを、どうして許されようか？

おお、自然崇拝を捨てた友よ、さあそなた自身が答えるがよい。

彼は言う。

「アッラーに称えあれ！この二つの疑念が解けた今、汝が示した神の唯一性と、真に崇拝される御方がまさにその方であり、その他のものは崇拝に値しないという二つの証明は、あまりにも明白で力強い。これを否定することは、太陽と白昼を否定するにも等しき傲慢である。」



結語

自然という不信の思想を捨て、信仰に立ち返った人が言う。

「すべての称讃はアッラーに属す。私にはもはや疑いは残っていない。ただ、知的な興味からいくつかの問いをしたい。」

第一の問い：

多くの怠惰な者や礼拝を放棄した者たちから、しばしばこう聞く—「アッラーが我々の礼拝を必要とするわけがあるのか？にもかかわらず、クルアーンではなぜ、礼拝を怠る者をあれほど厳しく戒め、地獄という恐ろしい罰で脅すのか？公正で中庸なるクルアーンの表現に、どうして取るに足らぬ小さな過失に対して、あのような極端な厳罰が似つかわしいのか？」

答え：

確かに、尊厳なるアッラーは、おまえの礼拝を必要としていない。いや、そもそも何ものもアッラーを必要とさせることはできぬ。

しかし、礼拝を必要としているのはおまえ自身である。おまえは精神的に病んでいるのだ。崇拝とは、その魂の病に効く霊的な薬であることを、すでに多くの書簡で証明してきた。

思い出すがよい—もし病人が、慈悲深い医師から「この薬を飲みなさい」と勧められ、それが明らかに益のあるものであるにもかかわらず、「おまえが何を欲して私にそれを勧めるのだ？」と言い返したとしたら、それがどれほど愚かで無意味であるかを理解できよう。

さて、クルアーンが礼拝を怠る者に対してきわめて厳しい警告と恐ろしい罰を述べるのはなぜか。—それは、王が臣民の権利を守るために、たとえ一人の卑しい者が臣民の権利を侵害したときにも、厳罰をもって臨むのと同じである。

同様に、礼拝や祈りを放棄する者は、永遠の王の被造物という臣民の権利に重大な侵害を加え、霊的な不正を犯しているのだ。なぜなら、すべての存在の完成は、造り主に向かう顔において、讃美と礼拝を通じて現れる。

ゆえに、礼拝を怠る者は、万物の礼拝を見ようとせず、見ることもできず、むしろそれを否定する。そしてその結果、礼拝と讃美という点で高貴な地位にある被造物—それぞれが神への書簡であり、主の御名の鏡である存在—を、その高位から引き下ろし、価値なき、無目的な、無機的で混乱した存在としてみなしてしまう。

このようにして彼は、万物を貶め、その完成を否定し、その権利を侵すのである。

すべての人は、自分自身の心という鏡を通して宇宙を見る。尊厳なるアッラーは、人間を宇宙を量るための尺度として、また秤として創造された。各人には、この外界に対応する独自の内なる世界が与えられており、その世界の色は、その人の心の信仰に応じて映し出される。

たとえば、深い悲しみに沈み涙を流す者は、万物をもまた泣いているかのように、沈んだ姿に見る。反対に、喜びと朗らかさに満ち、心から笑う者は、宇宙をもまた笑みを含んでいるように見る。同じく、深く思索し、真剣な態度で礼拝と讃美に向き合う者は、万物が本来もっている礼拝と讃美

の真実を、ある程度発見し目撃するのである。

しかし、無関心や否定によって礼拝を棄てる者は、万物を本来の完成した姿とは正反対のかたちに、誤って思い描き、精神的にその権利を侵すことになる。

さらに、崇拝を放棄する者は、自分自身の魂を害している。なぜなら人は自分に対して主人ではなく、その魂はアッラーの僕であるから、その魂への暴虐は、魂の真の持ち主に対する暴虐に等しい。ゆえにアッラーは、その魂の権利を守るために厳しい警告を与えられる。また、人間の創造の目的であり本性の究極である礼拝を棄てることは、神の御知恵と御意志に対する反逆にあたるため、罰を受けることになる。

結論として、崇拝を捨てる者は、自分自身に不正を行うのみならず、宇宙の完成した本質に対しても不正を働くのである。信仰の否定が万物に対する侮辱であるように、礼拝の放棄は宇宙の完成の否定である。また、それは神の御知恵への挑戦でもあるため、厳しい警告と重い罰にふさわしい。

これらの真実を示すために、クルアーンは奇跡のように絶妙な表現をもちいて、あの厳しい語調を選んでいる。それは現実の状況にまさしく適う、真の雄弁さの表れなのである。

第二の問い：

自然観念を捨てて信仰に入った者はこう述べるのである。

「すべての存在が、あらゆる側面において、あらゆる働きにおいて、あらゆる状態において、神の御意志と主としての御力に従っているということは、きわめて偉大な真理である。しかしその偉大さゆえ、我らの狭い理解には容易に収まりがたい。

ところが、眼前に広がる無限の豊かさ、創造の場面に見える計り知れぬ容易さ、さらにあなたがこれまで示した証明によって明らかになった唯一性の道における創造の極度の簡明さ、そしてクルアーンが明白に語る

مَا خَلَقُكُمْ وَلَا بَعَثُكُمْ إِلَّا كَنَفْسٍ وَاحِدَةً
وَمَا أَمْرُ السَّاعَةِ إِلَّا كَلَمْحِ الْبَصَرِ أَوْ هُوَ أَقْرَبُ

のような聖句が示す極度の容易さ。これらすべては、この偉大なる真理がもっとも自然で、もっとも合理的な事柄であることを示している。

では、この容易さの秘密と智慧とは何であるのか。」

答え。

二十番目の書簡の「第十の言葉」にある

وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ

の解説において、この秘密はひじょうに明瞭に、確実に、そして十分に説明されている。特にその書簡の末尾では、さらに大きな明晰さをもって証明されている。

すなわち、すべての存在が唯一の創造者に帰されるとき、それらはあたかも一つの存在であるかのように容易になるのである。

反対に、もし唯一の御方に帰されないなら、一つの被造物の創造が、全宇宙の創造と同等の困難を要し、一粒の種が一本の大樹と同じほど難しくなる。

しかし真の創造主に帰するならば、宇宙は一本の木のように、木は一粒の種のように

に、樂園は春のように、春は一輪の花のように容易となる。

また、我らが目の前で見ている限りない豊かさと安さ、多様な種の膨大な数、それらの速さ、秩序、芸術性、価値。これらが極度の容易さのうちに出現しているという現象は、背後に深い智慧と多数の秘密が存在する証拠である。

そのような証は数百あるが、ここでは他の書で詳述されているもののうち、二点のみを簡潔に示す。

たとえば次のように例えることができる。百人の兵士を一人の士官の指揮下に置くことは、一人の兵士を百人の士官の指揮下に置くよりも、百倍は容易である。同様に、一軍の軍備と補給も、一つの中心、一つの規律、一つの工場、そして一人の王の命令に依拠する時、量的にはほとんど一人の兵士を整えるのと変わらぬほど容易となる。

これに反して、一人の兵士の軍備を、複数の中心、複数の工場、複数の指揮官に分割して任せるならば、かえって一軍全体を整えるほどの困難さが生じる。なぜなら、

一兵の軍備に必要なものは、結局のところ
軍全体に必要な全工廠を要するからである

。

また、一本の木も同様である。統一の秘密によって、一つの根、一つの中心、一つの生命法則から養分を受けるため、何千もの実を实らせていても、一つの実を育てる程度の容易さで成り立っていることが、目をもって明らかに見える。もしこの統一が失われ、各実に必要な生命の物質を別々の場所から与えねばならないとすれば、各実是一本の木ほどの困難を抱えることになる。むしろ、木全体の縮図であり、要約である一粒の種でさえ、その木と同じほどの困難を要することになる。なぜなら、一つの木の生命に必要なものは、一粒の種にとってもまた必要だからである。

このような例は数えきれぬほど存在し、いずれも同じことを示している。すなわち、統一のもとでは、数千の存在が究極の容易さのうちに生み出されるのに対し、多元化と分散のもとでは、一つの存在でさえ、数千の存在よりも難しくなるという事実である。この真理は他の多くの書簡において

、二足す二が四であるほどの確実さをもって証明されているため、ここではその詳細を省き、ただこの容易さの背後にある、神の知・定め・御力の観点からきわめて重要な一つの秘密のみを述べる。

それは次のようなものである。

あなたという存在は、一つの被造物である。もしあなたが永遠にして全能の御方に自己を委ねるならば、火花をひとつ散らすように、無から、一つの命令によって、限りなき力により瞬時に創造されるのである。

しかし、もしあなたが自己をその御方に委ねず、物質の原因や自然に帰するならば、あなたは宇宙の精妙な要約であり、一つの果実であり、小さな索引であり、一覧表であるがゆえに、あなたを作るためには、宇宙全体を微細な篩にかけ、厳密な尺度によって世界各地からあなたの身体を構成する物質を集めねばならなくなる。なぜなら、物質的原因はただ「寄せ集めて組み合わせる」ことしかできず、自ら持たないものを無から創り出すことは一切不可能であることが、理性ある者には明らかだからである

。結局、最も小さな生命体一つを形づくるにも、世界中から要素を集めざるを得なくなる。

以上を通して、統一と唯一の道にはいかに容易さがあり、分散と否認の道にはいかに計り知れぬ困難が潜んでいるかを理解せよ。

第二として述べられることは、知の側面において限りない容易さが存在するという点である。その意味は次のとおりである。定めとは、知の一種であり、万物に対して霊的で固有の「型」としての寸法を定める働きをもつ。この定められた寸法は、その存在の現実化に際して一つの設計図となり、模型となる。

全能の御力が創造を行うときは、この定められた寸法に従い、きわめて容易にその存在を創りあげるのである。

しかし、もしその存在が、すべてを包み込み、限りなく、かつ永遠の知を所有する全能者に帰されないならば——すでに述べたとおり——数千の困難どころではなく、むしろ数えきれない不可能事が生ずる。なぜなら、この定め寸法、すなわち知的な

設計図がなければ、ほんの小さな動物の身体を形づくるために、数千もの外的で物質的な鑄型を使用せねばならなくなるからである。

ゆえに、統一のもとには無限の容易さがあり、否認と多元化の道には限りない困難が潜むという秘密を理解すべきである。そして次の聖句

وَمَا أَمْرُ السَّاعَةِ إِلَّا كَلَمْحِ الْبَصَرِ أَوْ هُوَ أَقْرَبُ

が、いかに真実で、正しく、崇高な現実を語っているかを悟るのである。

第三の問い。

以前は敵でありながら、今は友となった求道者はこう言うのである。「現代の哲学者の多くは、次のように主張する。『無からは何も創造されず、存在しているものが消滅することもない。宇宙を動かしているのは、ただ混合と分解だけである』と。」

答え。

クルアーンの光をもって現実を見ることができなかった哲学者たちのうち、もっとも先鋭な者たちは、自然や原因を通して存

在の構成と誕生を説明しようとしたとき——すでに証明したとおり——それが不可能に近いほど困難であることに気づき、二つの派に分かれた。

一つの派はソフィストとなり、人間固有の能力である理性を放棄し、愚かな獣よりも下へと堕ちてしまった。そして宇宙の存在を否定し、さらには自分自身の存在まで否定した。なぜなら、誤りの道において、原因や自然に創造を担わせるよりも、宇宙そのものを否定してしまう方がまだ容易に思えたからである。かくして彼らは、完全なる無知へと墮落した。

もう一つの派はこう考えた。誤りの道において、原因や自然を創造者とみなすなら、一匹の小さな虫や一粒の種の創造でさえ、果てしない困難を要し、理性を超えた能力を必要とする。そこで彼らはやむなく創造そのものを否定し、「無からは存在しない」と言い、消滅も不可能であるとして「存在は無にならない」と断じた。

彼らはただ、原子の運動や偶然の風による混合・分解・散逸・集合といった「見か

けの状態」だけを想像するようになったのである。

見よ、自らをもっとも理性的であると思
い込む者ほど、実際にはいかに愚かで無知
の底に落ち得るか。誤りの道が、人間をい
かに戯画のようにし、卑しくし、無知に変
えてしまうか—深く考え、教訓とすべきで
ある。

さて、毎年、四十万もの種類を同時に地
上に創造し、天と地を六日のうちに創り、
さらに六週間ごと、すなわち毎春に、全宇
宙よりも精巧で、より深い叡智を宿す「生
命の宇宙」を再び築き上げる永遠の力をも
つ御方について考えてみよ。

その御方が、永遠の知の領域において設
計図と寸法が定められている「知の中の存
在」を、あたかも“見えない文字に薬剤を
塗れば浮かび上がる”ように、容易に外の
存在へと現実化する能力を持たぬと見なし
たり、その創造を否定したりすることは、
先のソフィストたちよりもさらに愚かで無
知な振る舞いである。

この不幸な人々は、自分自身の無力さを
知るべきである。彼らは完全に無力であり

、わずかな選択の自由以外には何ひとつ自分の手元に持たず、しかも自らの魂をファラオのように増長させていながら、実際には何ひとつ消滅させることもできず、一つの粒子すら無から創造することもできない。拠り所とする原因や自然のいずれにも、無から創造する力は存在しない。そのため彼らは愚かにも、「無からは存在しない、存在は無にならない」と言い張り、この誤った原理を全能の御方にまで押しつけようとするのである。

しかし、全能にして崇高なる御方の創造には二つの方式がある。

一つは、純粹なる創造である。これは無から存在を与え、その存在に必要なものをすべて無から創り、与える創造である。

もう一つは、組み立てと技芸による創造である。これは深遠なる叡智と、多数の御名の輝きを顕すために、宇宙の元素から一部の存在を組み立てる方式である。

御命令に従う微粒子と諸物質は、与える法に従ってその場へ送り込まれ、そこで働かされるのである。

このように、全能の御方は、無から創り、あるいは組み立てて創るという二つの形を持つ。

有るものを無にし、無を有にすること——これはもっとも容易にして、もっとも普遍的、しかも常に働いている法則である。

春のひとつきに、三十万種類の生命ある存在の形態も性質も、粒子を除けばほとんどすべての状態を無から生み出す御力の前で、「無を有にできるはずがない」と言い張る者は、自らが無に帰すべきである。

自然を捨て、真理へと歩みを進めた者は次のように言う。

「大地の粒子の数ほどに、アッラーに感謝と賛美を捧げる。私は完全なる信仰を得、疑念と誤謬から救われ、もはや一片の迷いも残っていない。」

الْحَمْدُ لِلَّهِ عَلَى دِينِ الْإِسْلَامِ وَ كَمَالِ الْإِيمَانِ
سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
الْحَكِيمُ

